

■卒業論文要旨■

地方都市の地場産業の動向

一福井県武生市の打刃物一

青木七穂

福井県武生市の地場産業である打刃物業を調べた。武生市の打刃物業は、「越前打刃物」といって、1337年（南北朝時代）京都の刀匠千代鶴安が府中（現・武生市）に刀剣製作の水を求め来た。かたわら近郊の農民のために鎌を作ったことから始まったといわれている。その後、福井藩の保護政策により江戸時代には株仲間が組織されるなど、販路も全国に及んだ。それは当初、漆掻きのため全国にでかけるとき、刃物を売り歩いたことから始まった。現在は日本古来の火作り鍛造技術、手仕上げを守りながら、鎌、折り込み鋏、手包丁を主製品としている。

しかし、現在武生の打刃物業は衰退の一途をたどっている。これは戦後、西欧化の波に押されてのことであった。このことは、既存の論文や、関係資料ですでに知られるところではあったが、実際に関係する機関に行き、関係者からその様子を聞いたことで、より一層そのことは明確になった。更に、工業統計等をもとに生産額や事業所数の推移をグラフ化すると、極端な下落はなかったが、徐々に衰退している状況にあった。武生市の打刃物業は福井県内の他の主要産業の中でも目立った存在ではないが、昔からの伝統を守りつつも、新たな技術を取り入れ、孤軍奮闘しているというのが現状だ。また、特に地場産業全体にいえることだが、後継者問題はさけて通れない。いわゆる3Kといった部類の職種で、特に若い人には敬遠される傾向にある。伝統工芸に従事する者は、一人前の職人になるまでにはかなりの年月が要される。このような状況にある武生市の地場産業である打刃物の最も注目されるのは、タケフナイフビレッジという工房である。ここでは実際の打ち刃物の製造工程などを見ることができる。展示即売も行われており、武生市の観光のスポットとしても注目されており、若手の製

造業者が一丸となって、明日の武生の打刃物を担っている場所である。

高度情報化社会の到来で、手を変え品を変え、私達のもとに多種の商品や情報を得ることができるようになった。こういった情勢では、大量生産、大量消費は免れえないのが現実だ。そしてこのことは、消費者にいかにも多くの問題を投げかけているかにもなる。しかしそんな時代であるからこそ、商品は「量よりも質が問われる」といっても過言ではない。武生の打刃物業が、このような社会に対応するには、かなりの労力が強いられることであろう。しかし、その時代に対応すべく、大量生産はできないけれども、少量ではあるが、質の高い良い物を消費者に提供するため、武生の打刃物業は日々努力を重ねている。

スポーツと地域社会

一清水市におけるサッカーチームの活動を事例に一

東寛子

近年、スポーツが地域づくりのテーマとして取り上げられることが多くなったが、静岡県清水市は、40年以上も前から「サッカー」を地域スポーツとして根づかせるため、様々な取り組みを行ってきた。現在、人口約24万人のうち、サッカー選手は凡そ3万人といわれ、「サッカーのまち」として全国にその名を轟かせている。

本論文は、市民が地域（地区）レベルで行っているサッカー活動を通して、清水市民と「サッカー」の関わり合い、「サッカー」が清水市の地域社会形成に与える影響について考察することを目的とするものである。

清水市におけるサッカーは、底辺にあたる少年サッカーの普及から始まった。1956年、江尻小学校に赴任した堀田哲爾教諭により、日本初の小学生サッカーチームが結成された。やがて、他の小学校でも数人の指導者（教員）によってチームが結成され、少年サッ

カーが市内全域に広がっていく。子供がサッカーを始めたことで、それを見ていた両親もサッカーをやるようになり、しだいにサッカーは「ファミリースポーツ」の様相を呈してくる。そして今では、幼児からお年寄りまで年齢・性別を問わず楽しめる「生涯スポーツ」となったのである。また、年を追うごとに清水サッカー協会をはじめ、指導者間、育成会の組織力、結びつきも強固なものになっていった。

清水市のサッカーの具体的な活動事例として、まず「清水カップ全国少年少女草サッカー大会」を取り上げた。全国から288チームが参加し、5日間にわたって行われる大規模な大会を、実際に運営するのは少年団育成会の父母である。会場は、市内の小・中学校のグラウンドを利用し、高校生が審判、中学生が記録を行うという、市民による手作りの大会である。市・サッカー協会・育成会が三者一体となって運営し、宿泊、交通、会場をこれだけの人数分確保できるのは、サッカーに理解のある土地、清水市ならではの。

第2の活動事例として、社会人（同好会）チームの一つ、「清水エランビタールFC」というチームの活動を挙げた。市教大というサークルの〇期生という繋がりをベースに、各々の友人を誘って結成されたチームである。初心者が多く、技術的には未熟な面もあるが、メンバーはとても仲が良く、本当にサッカーを楽しんでいる。また、「エランビタールに入っていなければ知り合えなかった仲間が大勢いる」という意見にみられるように、仕事以外の人間関係を重視していた。

学校や職場など、限られた空間以外での交流、人間関係の構築に核となるのが、清水では「サッカー活動」であるといえるだろう。今回の調査で、「サッカー」というスポーツが、清水市の人々にとって常に身近にある存在だということを強く感じた。清水市のサッカーの種を撒いた指導者達やサッカー協会が、サッカーを楽しむ風土、サッカーを身近

に感じられる環境を築いてきたからこそ、サッカーは清水市において、人々を結びつけ、地域社会を形成する核となる、いわば地域文化だといえるのである。

“食の力” — 「佐野ら一めん」

五十嵐理真

日本ほど麺文化の発達した国も珍しい。その中でも最も地域性とバラエティに富んだ麺はラーメンであると言えよう。明治後期に中国から伝わり、百年もたたぬうちに瞬く間に日本の各地域に浸透した。そのパワーと速度は計り知れない。この偉大なラーメンの一つ、栃木県の「佐野ら一めん」に着目した。佐野ら一めんは、2メートルもの長い青竹で麺を打つ、平打ち縮れの青竹手打ち麺と、トンコツ、鶏、野菜をベースにしたアッサリ醤油味のスープを特徴とした本格派ラーメンである。

佐野ら一めんは、日本三大小麦の産地・日本名水百選出流原弁天池の湧き水・低湿度の冬と内陸性の暑い夏という地理的背景に加え、大正5年頃横浜中華街からやってきた中国人コックが伝えたら一めんが、当時織物産業が盛んだった佐野でそこで働く織工さんたちの夜食や出前として利用されたのを機に、次々とラーメン店が増えたという歴史的背景を持つ。市内には約230軒のラーメン屋がひしめき、市民は週に1回以上は必ずラーメンを食べる。特にお客さまが来た時、すしでなくラーメンをご馳走としてもてなしたり、家族揃って外食するのもラーメン、恋人たちのデートにもラーメン、というのが佐野流だ。昭和63年には「佐野ら一めん会」が結成され、佐野ら一めんのPR活動を全国に向けて積極的に行っており、ら一めん会発足で観光客は倍増。佐野は今や“ら一めんの町”として各地に知れるところとなった。東北自動車道や国道が走り、車の便が良いこともあって、休日には他の県からラーメンを食べにやってくる。